（京都学園大学経営学部論集　第17巻 第3号　2008年3月　71頁～84頁）

研究ノート

「ロレンスと旅」再考

――『イタリアの薄明』の「亡命のイタリア人」を読んで―――

岡　野　圭　壹

はじめに

厚い雲に覆われ，どんよりとした冬空のもとでの生活をよぎなくされるイギリス人にとって，イタリアという国は，明るい陽光を求めて訪れてみたい南の国である。ルネッサンス発祥の地フローレンスにも，この地を愛し，訪れたり長期別荘に住んでいたりするイギリス人も多い。D. H. ロレンスもE. M. フォースターもその例外ではなく，20世紀初めにイタリアを訪れ，フローレンスにも滞在し，それをもとに小説を書いている。その中で両作家は，北欧のキリスト教精神風土の中に育ち，社会の因習に囚われていたり，機械文明の余弊に忌み疲れていたりするイギリス人を登場させ，彼（女）らが知性や精神よりも生きた感覚が重んじられる南欧の国イタリアに旅し，その地で生命のほとばしりを感じとり，再生への道を模索していく姿を描いている。その作品は，ロレンスについては *The Lost Girl* と *Aaron's Rod* であり，フォースターについては *Where Angels Fear to Tread* と *A Room with a View* である。それらの作品について筆者は，二つの論文[1)]を発表した。その両作家の作品の人物や背景はかなり

1) 「Lawrence と Forster ――イタリアを背景とする作品について――」，同志社大学英文学会編『主流』別冊太田藤一郎先生追悼号（1982），81-96。「ロレンスとフォースター――フィレンツェをめぐって」（D. H. ロレンス研究会編「ロレンス研究――『アロンの杖』――」朝日出版社，1988），227-244。

違うけれども，テーマは，簡単に言えば，イタリア旅行の経験を通して，またその地の霊に包まれ，登場人物がいかにして新たな生への道を歩んでいくか，ということである。両作家のイタリアへの旅を軸にして展開する作品の比較を試みながら，作品の特質を浮き彫りにしようとしたものである。

またロレンスはイタリア紀行文学の代表的作家の一人とも言われていて[2]，*Twilight in Italy*（『イタリアの薄明』），*Sea and Sardenia*（『海とサルデニア』），*Etruscan Places*（『エトルリア遺跡』）の三冊のイタリア旅行記を書いている。これらのイタリア旅行記は，作者の人生上の，また創作上の貴重な体験となった旅において，旅先の風土，自然に溶け込んで感化されたり，旅行中の出来事，出会い，異文化体験などから触発されたりして，それぞれ生まれたのであるが，その旅行記について上村哲彦氏は，イタリアとの邂逅，サルデニアの地で太古の生命の暗い輝きを見た経験，エトルリア遺跡に見る永遠の生命の受容は，ロレンスという作家にとっての一つの「循環の輪」の中で理解できる，と名著『ロレンスのイタリア』の中で示唆に富んだ言及をされている[3]。

この研究ノートでは，D. H. ロレンス研究会で輪読してきた *Twilight in Italy* の中から私が担当した 'Italians in Exile'（「亡命のイタリア人」）を取り上げ，それに関連する 'The Return Journey'（「戻り旅」）と当時のロレンスの書簡にも言及しながら，北イタリア，ドイツ，スイスを旅するロレンスを追っていきたい。研究会では今，ケンブリッジ版のロレンス書簡集Ⅰ－Ⅷから1912，1913，1914年のものを翻訳出版中であるが[4]，書簡集はロレンスの文筆活動やその生き様を知る上でも，社会や時代の背景などを垣間見ていく上でも大いに役立つし，

2） J. Alcorn, *The Nature Novel from Hardy to Lawrence* (New York: Columbia Univ. Press, 1977), p.42.
3） 上村哲彦，『ロレンスのイタリア』（彩流社，1996），5-12，225-227。
4） D. H. Lawrence, *The Letters of D. H. Lawrence* (Cambridge University Press, General Editor: James T. Boulton & Some Others, 1981).『D. H. ロレンス書簡集』Ⅲ（2005），Ⅳ（2007），Ⅴ（2008）松柏社。なお，同書から引用した個所は，書簡と略し，引用した頁数のみ本論に記す。

書簡には，小説や旅行記などとは少し趣の違った作者の生の声や思いが書き込まれていて，旅の状況や様子が単刀直入に伝わってくるであろう。

1. 'Italians in Exile'

*Twilight in Italy*に書かれたエッセイやスケッチや旅行記などは1912年９月から1913年10月にかけて書かれ，1915年７月から10月にかけて改稿されている。'Italians in Exile'と'The Return Journey'は1913年10月に書かれた。その'Italians in Exile'にはコンスタンスからシャウハウゼンまで汽船と徒歩で一人旅し，スイスとイタリアの国境線近くにある宿の「金鹿亭」に一夜を明かす様子や，その徒次通過する土地やそこに暮らす人びとや出会う人びとが，北欧の国イギリスから来たロレンスの視点から描かれている。第一次大戦前の時代背景に暮らすヨーロッパ大陸の人びとを通して，スイスや北イタリアとその時代の様子を垣間見ることができる。

ロレンスは，ボーデン湖畔のコンスタンスからシャフハウゼン行きのライン川下りの汽船に乗り，天気や空や湖面の状況などを詳細に，生き生きと繊細に描写する。その淀みなく水が流れるような筆致はさすが紀行文学三大作家の一人と言われるだけのものがある。

> When I was in Constance the weather was misty and enervating and depressing, it was no pleasure to travel on the big desolate lake.
>
> When I went from Constance, it was on a small steamer down the Rhine to Schaffhausen. That was beautiful. Still, the mist hung over the waters, over the wide shadows of the river, and the sun, coming through the morning, made lovely yellow lights beneath the bluish haze, so that it seemed like the beginning of the world. And there was a hawk in the

> upper air fighting with two crows, or two rooks. Ever they rose higher and higher, the crow flickering above the attacking hawk, the fight going on like some strange symbol in the sky, the Germans on deck watching with pleasure.[5)]

もやのかかった陰気な湖面を行くのは嫌なロレンスではあったが，ライン川を下って汽船にのる船旅は快適なものとなる。太陽が顔を出し，青っぽいもやの下に素敵な黄色い光線を醸しだし，世界の始めのような感じを与えてくれる，と描き，そこに鷹と烏の空中戦の模様を描写する。何の変哲もないような駆け出し文であるが，川の流れのように流麗な文体で描かれるこの場面には，何か意味深い象徴性が込められているのではないだろうか。「ライン川下り」における空模様の暗から明への変化，鷹と烏の２羽の鳥による空中戦に見る「奇妙な象徴」などは，穿った見方かもしれないが，ライン川には何か地霊とも言えるものが存在し，そこを通る人に何らかの感化を与えることを示唆するもであり，２羽の烏の闘いはロレンスの持論である，「明と暗，光と闇，生と死」などを示唆するものである，と言えないだろうか。それは，ロレンスやフォースターのイタリアを舞台にした小説や旅行記の主題とでも言える，生と死の世界を垣間見，地霊に包まれ，出会いと邂逅を体験し，再生をしていくことに結びついている，とさえ筆者には思えるのである。

そもそもロレンスのイタリア旅行は，フリーダと出会い，愛し合うということから始まった。この邂逅なくして彼女の国ドイツへ駆け落ちしていくという劇的な旅はなく，イタリア旅行記も誕生したかどうか分からない。ロレンスが初めてフリーダに出会ったのは1912年３月である。ロレンスが恩師ウィーク

5) D.H. Lawrence, *Twilight in Italy* (Penguin Books, 1916), 129. なお，同テキストから引用した個所は，TI と略し，引用した頁数のみ本論に記す。

リーの家を訪問し，教職の世話を頼むが，そこで夫人のフリーダに出会う。二人は互いに惹かれあい，「あなたはイギリス一の魅力的な女性です」とだけ書かれたラブレター（3月20日ごろ，書簡Ⅲ，387，訳者北崎契縁）を送る。彼女への最初の手紙である。そして5月3日フリーダと一緒にイギリスを出立し，翌日彼女の故郷メッツに到着している。フリーダが実家に行っている間，ロレンスはホテルなどを転々とする。二人がまた一緒に行動する迄にも多くの手紙を送っていて，フリーダとの駆け落ちや離婚問題に揺れる二人の不安と苦悩に充ちた愛の確認の手紙となっている。二人の結婚式は1914年7月13日ロンドン，ケンジントンの登記所で，キャンベルとマリーの立会人のもと行われる。それについてはエドワード・マーシュ宛の手紙（1914年7月11日，15日付け），サリー・ホプキン宛の手紙（同年7月13日付け），エドワード・ガーネット宛の手紙（同年7月14日）などに記されている。

'Italians in Exile' には，スイスとイタリアの国境線近くの「金鹿亭」という宿で，ロレンスがイタリア人の浮浪者，放浪者や乞食らと一緒になる場面がある。食事は団子入りのスープ，パンと肉などが出されていた。ロレンスはスープとパンをお腹一杯食べ，ビールを飲むと，眠くなる。出された食事がどんな味であったか，食事や味覚についての言及はあまりないが，たらふく食べ，食事には満足したようである。旅の疲れがあっても，ロレンスは，イタリア人が食事中，気楽に騒いで陽気さを取り戻すことを描写するなど，夜の宿の観察はのがさない。女主人にタバコを頼み，話を楽しもうとする。何でも見てやろう，聞いてやろうという作家魂と感性を見せる。翌朝もドイツに近いこの宿の周辺を次のように描写する。

Everywhere was very clean, full of the German morning energy and

brightness, which is so different from the Latin morning. The Italians are dead and torpid first thing, the Germans are energetic and cheerful.

It was cheerful in the sunny morning, looking down on the swift river, the covered, picturesque bridge, the bank and the hill opposite. Then down the curving road of the facing hill the Swiss cavalry came riding, men in blue uniforms. I went out to watch them. They came thundering romantically through the dark cavern of the roofed-in bridge, and they dismounted at the entrance to the village. There was a fresh morning-cheerful newness everywhere, in the arrival of the troops, in the welcome of the villagers. (TI, 133)

「イタリアの朝は死んだようで無力なのに対し，ドイツの朝は力強い」，とロレンスは感じとる。そこに登場するスイス騎兵隊について，ドイツ人の機械的で少し陰気なしぐさと比べて，スイス騎兵隊は気楽で穏やかな感じがあるとして次のように記述する。

It was all very pleasant and genuine; there was a sense of ease and peacefulness, quite different from the mechanical, slightly sullen manoeuvring of the Germans. (*Ibid.*, 133-4)

さらにスイスの国についても生気のない，死んだような地域ばかりで，月並みな安らかさしかない，と次のように言う。

One gets this feeling always in Switzerland, except high up: this feeling of average, of utter soulless ordinariness, something intolerable.

> Mile after mile, to Zurich, it was just the same. It was just the same in the tram-car going into Zurich; it was just the same in the town, in the shops, in the restaurant. All was the utmost level of ordinariness and well-being, but so ordinary that it was like a blight. All the picturesqueness of the town is nothing, it is like a most ordinary, average, usual person in an old costume. The place was soul-killing. (*Ibid.*, 134)

このスイスの「ぞっとするほどの平均化された生活」（this dead level of average life, *Ibid.*, 135）を町の概観や雰囲気で掴み取るロレンスの感覚や洞察力は立派なものである。が，あまり言及されていないけれど，もともとスイスは，ドイツ，フランス，イタリアなどのヨーロッパでは比較的大きな国々に囲まれた小さな山国で，国民皆兵制を敷く武装中立国であった。この地勢と国民皆兵制を抜きにしてはスイスの政治，文化，社会は語れないであろう。射撃は中世以来の国技として定着し，武器類は各家庭で保管している。ロレンスが旅して回った第一次大戦前と時代が少し違うが，20世紀末，国民は20歳で初年兵学校に入学し，17週間の訓練を受け，以後，兵役義務年齢は，兵卒は50歳まで，将校は55歳までで，生涯を通じて合計１年間の軍事訓練を受けることになっている。職業軍人は千人程度でしかない。半直接民主制が定着していて，平等の権利，義務という観念が強くあり，国内政治が安定している。こうしたことから皆で国を守るという意識は強いと言えよう。それだけに一致団結というチームワーク的な団結力があり，すべて平均化されたものを尊ぶ思いが，これまで伝統的に意識の根底にあったのではないだろうか。

さらに言語の問題があるであろう。スイスには「言語の理論的平等性」があって，言語戦争が起きない。国民の使用言語は，ドイツ語（65％），フランス語（18.4％），イタリア語（9.8％），レート・ロマンス語（0.8％），その他

（６％）（1980）である。各言語の平等性が維持できたのは古誓約同盟の小国家連合や現代スイスのカントンという準国家連合が「言語の平和的関係」を可能にしている，という[6]。

ロレンスの旅行記に見る詳細で繊細な自然や人物描写や哲学的思考は，実際に足で歩いた地域の体験をもとに生み出されたものである。彼の記憶や思考の緻密さ，正確さや博学なことには驚嘆のほかない。同じことがケンブリッジ版のロレンスの書簡集にも言える。実際に何巻もの大部な書簡集を前にすると，ロレンスが旅先で送った手紙はどのようにして保管され，また集められて書簡集として編纂されたのであろうか，その困難さと手間とを厭わない編集者らの熱意に驚くほかない。

北イタリア，ドイツ，スイス訪問時の書簡を見てみると，ロレンスは1912年９月から1913年４月までフリーダとイタリアのガルダ湖畔で過ごすが，イタリアでの生活拠点についてエドワード・ガーネット宛の８月４日付けの手紙で詳細に述べている。「わたしたちは明日ここを離れます」（書簡Ⅲ，191-4，訳者吉田祐子）と３回も記して，興奮気味な様子が窺える。ロレンスの計画によると，インスブルックからマイアホーフェンまで10マイル歩き，１，２週間後にイタリア語圏のスイスへと下り，ガルダ湖畔かマッジョーレ湖畔で冬を過ごす。1913年６月中旬，イギリスに帰り，２か月近くロンドンに滞在し，再びドイツに行く。そして９月15日付けの手紙では，フリーダがバーデン・バーデンの実家に滞在している間に，スイスを１週間歩く，ということである。そして9月30日付けの手紙で，「スイスはあまりにも観光客が多すぎて台なしです」（書簡Ⅳ，224，訳者吉村宏一），またジョン・ミドルトン・マリ宛の同日付けの手紙では，「スイスはあまりにミルクチョコレート的で，旅行者に踏み潰されすぎて

6）森田安一，『スイス――歴史から現代へ』（刀水書房，1980），167-70，254-60。

います」（書簡Ⅳ，406，訳者横山三鶴）と記している。10月14日付けのエドワード・マーシュ宛の手紙では，「スイスはいささか陳腐です」（書簡Ⅳ，329，拙訳）というように，一貫してスイスがあまりに観光立国ぶったこ奇麗さを見せることをけなしている。

こうした数多い書簡を読むことには，どんな意味があろうか。手紙の内容だけではなく，手紙を通して見せるロレンスの人柄，手紙の文面を通して読み取れる感情や展開される思考，さらにはその文体表現などを見ると，書簡体文学と言ってもいいように思われる。『D. H. ロレンス書簡集Ⅳ 1913』の編者者の一人岩井学氏が，「解題『一九一三年とロレンス』およびあとがき」で，次のような示唆に富んだ解説を記している。

> このようにロレンスは，当時流行の思想や芸術の息づかいを直に体験していたわけではない。この時期のロレンスは，自分とは全く異なる境遇を生きてきたパートナーと手を携え，大陸を旅して歩きながら，行く先々でのローカルな出来事と，他者を通して間接的に摂取した文化や思潮とを融合させ，それを独自の思想や芸術，そして書簡へと昇華させていったのである。大戦前夜の不穏当な空気のなか，芸術，人生，そして愛について書き連ねられたこれら，一連の書簡をどのように読み，糧としていくかは，同様のきな臭さのはびこる現代に生きるわれわれ読者一人ひとりに委ねられている。（書簡Ⅳ，479）

「大陸を旅して歩く」ことがどんな意味を持っているのか。*Twilight in Italy*の中で，旅を続けるロレンスは，また別な宿で出会うイタリア人の亡命者らに彼の旅（journey）について話す件がある。

They had all become more friendly to me, they accepted me.

'You are a German?' asked one youth.

'No—English.'

'English? But do you live in Switzerland?'

'No—I am walking to Italy.'

'On foot'

They looked with wakened eyes.

'Yes.'

So I told them about my journey. They were puzzled. They did not quite understand why I wanted to walk. But they were delighted with the idea of going to Lugano and Como and then to Milan. (TI,137-8)

ロレンスにとって歩くことは生命力の基本的な発露である[7)]。ここでロレンスが言わんとしていることは，山野を歩くことによってローカルなものや人物に出会い，自然にじかに触れ合うことができる。それによって人は自分を成長させる何かを得ることができるということである。大いなる自然の中で地や森の精，地の霊，牧羊神などに接するには，自分の足を使って前向きに望むことが必要であろう。この旅行記に見るロレンスは，出会う者やものに積極的に接し，話し掛け，視線を向け，観察し，生と死の臭いを嗅ぎ分ける。そこには観光案内書やパンフレットなどによる通り一遍の情報や知識や先入観などに惑わされることはない。

引用文にあるように，ロレンスの旅はさらにルッガノ，コモ，ミラノへとイタリアへ向けての徒歩旅行が続く。この宿の亡命者らの中心人物は，素早く生

7) 拙論：「生の探求——ロレンス『息子と恋人』論——」（『京都学園大学論集』第4巻第2号，昭和50年），47-75。ポールの生命力の基本は歩くことにあり，作品における歩く意味を探った。

き生きとしているが，あまり目に付かないジュゼッペという小柄な男である。その顔には「青白い焔，赤っぽい焔の中に一種のきらめきのようなものがあり，身体は影のように虚ろなものであった」（*Ibid.*, 140）。つまり，知的精神的な蒼白い輝きは見せているが，影の薄い人物である，と言えよう。ここでロレンスは，北欧と南欧の世界を取り上げる。つまり，前者は，精神的でキリスト教的世界，後者は，官能的で大地に根ざした生殖による生の世界を示唆していると言う（*Ibid.*, 142-3）。そしてイタリア人の彼らは，平均化されているスイスに暮らすが，もともと官能的には完成していても，精神的には未熟で，これから「新しい精神の花」がその官能の土壌に花開こうとしている，と述べるのである。

これらのイタリア人の中で一世代若いジョンらはイタリアの国には戻らないが，パオロ，イル・ドゥーロは愛国心があるので戻るという。ここには「イタリアの息子たち（sons of Italy（*Ibid.*, 143）」という語句が使われている。一般的には，イタリア人移民を指すものと思われるが，どんな意味合いがあるのだろうか。

ここでイタリア人の移民の歴史を見てみると，初期移民には，イタリア北部出身者が多く，商人，熟練技術者，宗教家，音楽家，政治亡命者たちがいた。19世紀末以降は，移民の８割が南部の農村出身の成人男性で，南部地域の人口過剰と貧困と地震，マラリアなどの自然環境の問題が要因となっていた。アメリカに移住した人びとはスラム街に住んでいたが，1920年以降の二世の社会的地位の上昇で新たな視野を持つコミュニティ組織の形成へと発展していく。1905年「イタリアの息子たち」を結成し，都市の多様な同郷者共済組合を地方支部として傘下に収め，20年前半までに全国1190支部に30万の会員を抱える大

8）清水廣一郎・北原敦，『概説イタリア史』（有斐閣，昭和63年），246-63。

組織となる。[8]「イタリアの息子たち」は，こうした社会の現実から生まれた言葉でないかと思われる。

宿で出会ったイタリア人亡命者らは無政府主義者で，生活の苦しさを訴え，政府の無能ぶりをまくしたてる。[9]それを聞いていてロレンスは「奇妙な否定的な磁力が心を止めてしまう」（*Ibid.*, 146）ことに耐えられなく，彼らにはもはや会いたくないと思う。作品に登場する亡命者についても，社会の一員であるという現実から切り離しては考えられない。彼らの背後には社会を崩壊させようとする魔の手が蠢（うごめ）いているという現実が示唆され，そうした現実を生み出した社会への批判となっている。

2. 'The Return Journey'

こうしたロレンスの対社会への，対物質文明への批判が次の 'The Return Journey' にも展開される。この旅行記の冒頭にロレンスは，「徒歩旅行の方向は西か南にしなければならい。北か東の方に向かって歩くと行き止まりの袋小路に迷い込むようなものである」（*Ibid.*, 151）と書いている。

その理由は「わたしたちの魂にとって，磁石の針は南西と北東を指していて，日没時，南西は陽極である」（*Ibid.*, 151）という。そのためスイスを通り抜けるのは，「陰気と失望の谷間」（*Ibid.*, 151）であって，気が滅入ることがあっても，「一歩ごとに明かりが閃き，前進の喜びが感じられる」（*Ibid.*, 151）と書いている。その喜び，生の漲る南の国イタリアへの旅の喜び，があるので宿でのロレンスには前向きに同宿者や宿の人たちに接し，いろいろな出会いを受容するゆとりがあったのであろう。南に向かって行く途中，雨に降られ，雑木林の中で

9）アナーキスト（無政府主義者）を生み出す背景が1860年以降のイタリアにはあった。労働者一般が劣悪な労働条件下にあり，バクーニンがイタリアに来てその無政府主義的社会革命論でマッツィーニ（ブルジョワ民主主義者）批判をする。政治不信がアナーキズム受容の温床となった。参照：森田鉄郎・重岡保郎，『イタリア現代史』（山川出版社，昭和52年），134-52。

雨宿りし，チューリッヒで買った食べ物の残りを食べながらも，心の柔和な者のように，大地を受け継いだような気になる。

しかしその喜びは長くは続かない。「ルシェルンやそこの湖は苛立たしく，ミルクチョコレートの包み紙のようだった」（*Ibid.*, 154）。さらに湖の南端にあったドイツ人の宿で出合った男はロンドンで事務所勤めしているイギリス人で，２週間の休暇を取ってスイスに来ていた。ドイツ語も山のこともよく知らない。ただ歩き回るだけで疲れきっていた。ロレンスがドイツ語で話し掛けても食事中の彼は，頭を振るだけで顔は上げず，英語で話しかけると，とうとうと話す。これでは旅先で他者と生きた関係が持てない。ロレンスは男の「小さな，用心深いイギリス人らしい人目を気にする動作」（*Ibid.*, 156）が気なる。男は時刻表の付いた旅行案内書を持っていた。この男の旅についてロレンスは次のように分析する。

> I could feel so well the machine that had him in its grip. He slaved for a year, mechanically, in London, riding in the Tube, working in the office. Then for a fortnight he was let free. So he rushed to Switzerland, with a tour planned out, and with just enough money to see him through, and to buy presents at Interlaken: bits of the edelweiss pottery: I could see him going home with them. (*Ibid.*, 156)

この引用文には，会社人間として仕事の歯車にはめ込まれて動く現代人の宿命が揶揄（やゆ）されている。一年間あくせく働いて，旅行案内書を持って二週間だけの旅行に出るが，大したお金もなく，ちょっとしたお土産でも買うことで満足して帰る。ただそれだけの旅，がむしゃらに歩き回って疲れにいくような旅，という現代日本人にもよく当てはまる無目的な，消耗するだけの死の旅となっている。ロレンスやフォースターの言う旅とはかけ離れたものになっている。両

作家にとって旅とは，訪ねる土地を案内書に頼って観光していくのではなく，自分の目で見，足で歩き，その地のローカルなものに，地の霊に直に触れていく，旅を通して新たな出会いや発見，邂逅を体験し，心や魂を開いていくという再生，新生に繋がるものなのである。

さらにアルプスの山を越え，南下していく中で，ロレンスは，「魅惑的な雪の中に，死の波を見出し，それが険と岩の大波となって平地にまで押し寄せていくように見え」（*Ibid.*, 159），アルプスの北斜面と南斜面の違いを感じ取る。南斜面には今でもパン神がいるような気がして心満たされる。しかし市街地ではその新しい大きな道路は，機械的で荒涼としていてぞっとするけれど，昔の道は道らしい道でよいと思う。こうしてアルプスの山を越えてペリンツォナに到着し，ミラノへ向かおうとするが，これまでの機械文明の破壊性を見せつけられたのであろう，歩いていく気にはなれない。そのミラノにはまだ人間の生き生きとした生活が見られたが，人間生命が完全に機械化されていく兆[10]を，ロレンスは読み取っている。

10）ミラノはイタリアでも有数の産業都市でその生産性は世界でも注目されている。わたしが何年も前にミラノへ行った時，イタリア料理についても，ミラノはアメリカのマクドナルドなどのファーストフード店を寄せ付けないイタリア最後の砦だと聞いていたが，街には何店舗か営業され，食のグローバリ化の波が押しよせていた。